
君がいた場所

篠崎 紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいた場所

【Nコード】

N6670H

【作者名】

篠崎 紫

【あらすじ】

ハリー・ポッター（親世代）の二次創作です。自己満足なので誹謗・中傷は遠慮願います。

ープロローグー

ープロローグー

いつもと違う景色
あのこは誰だ？

図書館から見える中庭

誰もいないはずの庭の片隅で
ただ一点をじっと見つめる

そのまっすぐな瞳に吸い寄せられて

気が付くと

俺は

彼女の前にいた。

「あなたは誰？」

彼女はそう言った。

「お前こそ誰だよ。」

「私？ 私はケイ、ケイ・ブラウンよ。あなたは？」

「シリウス・ブラックだ。それよりお前ここで何してるんだ？」

「あ…。ちよっとね…。」

ケイは息詰まった。すると、シリウスを呼ぶ声がした。

ジェームズ、リーマス、ピーターだ。

ジェームズが手を振りながら話した。

「シリウス占い学の授業の片付けじゃなかったっけ？ 早かったね。」

「まあな。それで、何なんだ？」

「別に。誰かさんがかわいい女の子としゃべっていたから心配になってね。」

あの子どこに行ったのかな？ こそこそどこかに行ったんだけど。」

「あーっ！ しまった、逃げられた！」

「何そんなに焦ってるんだよ。」

「実は女の子に告白…。」

ボコッ！

「そんなわけねえだろうが、このクソアホピーターっ！

だいたいなんで俺があんな意味のわからん女を好きにならなきゃなんないんだよ！」

そういうとシリウスは1人で歩いて行ってしまった。

最後にリーマスはこう言った。

「馬鹿ピーター。あのお坊ちゃんはやれろと大変だよ。それくらいわからないのかなあ。」

それから数日後にシリウスは驚くべき事実と直面した。

なんとあのケイ・ブラウンはグリフィンドール生だったのだ。

「なあ、リーマス。」

「なあに。」

「ケイってグリフィンドール生だったんだな。」

「ああ。知らなかったのか？」

「お前は知ってたのかよ。」

「一応は。だって有名だよ、日本とイギリスのハーフなんて。それで知らない方がおかしい。」

（確かに……。ケイって日本とイギリスのハーフだったんだ……。通りで東洋っぽい髪だよな。）

「じゃあねシリウス。僕は君みたいに頭が良くないんでね。

図書館でテスト対策してこなきゃ。」

そう言って談話室を去った。

そう。今この時期は期末テストの最中なのだ。

この時期に余裕なのはシリウスとジェームズぐらいだ。

まあジェームズはリリーと一緒に勉強しているが。

「ああ、つまんねえ。」

シリウスがそう思っていると目の前を誰かが通り過ぎた。

黒くしなやかな髪に深い藍色の瞳をしたケイだ。

ついシリウスは声をかけてしまった。

「おい。お前この間逃げただろう。」

「だから？」

「あの場所の秘密を教えてくださいよ。」

するとケイは、

「うーん。そうねえ…。」

じゃああなたが私の期末テストの勉強を手伝ってくれるのならいいわよ。」

シリウスは内心うっとうしかったが、どうしても気になったのでOKしてしまった。

それが事件の始まりだったのだ。

今日もシリウスは不満気に図書館にいる。隣にはケイがいる。そもそもシリウスがここにいるのもケイが原因だった。5日ほど前にシリウスがケイの秘密を知りたいがためにテスト勉強に付き合わされているのだ。

「ああ、うぜえ。」

「そんなこと言わないでよ、シリウス。もう少しなんだから。」
(なんで俺がこんな女の手伝いをやらなきゃなんないのかな…。めんどくせえな。)

こんなことをシリウスが考えているうちに隣でケイは終わろうとしていた。

「ふうーっ。やっと終わったー！ここ不安だから合ってるか見てくれない？」

そう言うと、ケイはシリウスに思い切り顔を近付けた。

(うゝっ。)

「何か文句でもあるの？」

そんなこと言う彼女はかなりかわいかった。お世辞抜きで。さすがのシリウスも頬が赤くなった。

「シリウス顔赤いよ。大丈夫？」

「ああ！それは大丈夫。本当に完璧、うん、最高！」

「…おかしいよ。」

「うるさい！誰のせいだ！」

「さあね。」

あはは、と笑うケイは

いつの間にか無くしたくない存在として
シリウスの心に刻まれていた。

「おい、ケイ。」

「何よシリウス。何か用？」

「あのさ、今日授業の片付けの当番なんだ。先に図書館に行つてくれねえ。」

「えー。いいよ別に。」

そして昼休み。

（やべえ遅れちまう。遅れたらどうなるんだ俺の人生。ああ…。）
授業が長引いたせいか、ケイとの約束に遅れる寸前だった。

時間にはどうにか間に合った。あとはいつもの席に行けばいいだけ。

（おいおい。こいつ寝てやがる。）

心地良さそうにすやすやと寝ているケイがそこにいた。
まるでネコのようなのだ。

（ん…？誰かのローブがかかってるぜ。げっ、スリザリンじゃねえかよ。）

ガサツ。後ろから物音がした。どこかで見たことのあるような人影だった。

「あーっ！セブルス、なんでお前がここにいるんだよ！」

そう。あの人影はスリザリンのセブルス・スネイプ。

シリウスとは犬猿の仲の男だった。

「お前こそ何でここにいるのかな？ 優等生のミスター・ブラック。」

「俺は好きでいるわけじゃねえんだよ。お前は どうしてなんだよ。」

「我輩はいつものように本を借りていた。ただそれだけだ。」

「それじゃあ…」

「うーん。うるさいわよ、セブルス。もう少し静かにして。」

心地良く人が眠ってたのに。

あらシリウスおはよう。遅かったじゃない。

セブルスと知り合いだったの？ 私とセブルスはいとこ同士なのよ。

知らなかったかしら？ まあいいわ、早くやりましょ。ね。」

「我輩は失礼する。」

「あつ。ローブありがと。」

「礼はいらん。」

すたすたと一人で行ってしまった。

シリウスはその場に立ち尽くしていた。

「シリウス。シリウス大丈夫？」

「ああ。お前とシリウスがいとこ…。」

「まあ、いいじゃない。隣座って。」

そして昨日と同じようにテスト勉強は始まっていくのだった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6670h/>

君がいた場所

2010年12月12日15時06分発行